セフィリアの使命
CRIMSON COMICS

セーターの中に手を入れてよ、あの温らかそうなオッパイを揉んでやりてえ
あの女、うなされたまんねえな、苦悩をべロべロしてやったらどんな顔するんだ・・・
色っぽいケツしやがってよ、両手で鷲掴みにしてやろうか

何人もの男たちの、そんなどす黒い欲望の先を、1人の若い女が歩いている。
スカートから、すらっと伸びた脚は驚くほど綺麗で、短めのタイトスカートに包まれたヒップの盛り上がりがキュッキュッと揺れている。
セーターの上からでも匂い立つ、抜群なプロポーションと、清楚な色気。
ウェーブのかかった長い髪は、俯目に反射して輝き、しっとりとした薄桃色の唇を甘く噛立たている。
スリットの隙間から、スカートの奥まで覗けそうなほど露出した魅力的な太腿に、
後ろを歩く数人の男たちが、熱く視線を突き刺している。

静かな表情、そして優美な足どり。
セフィリア＝ブークス、　人混みの中でも、一際輝かんばかりの美女である。

セフィリアは、一点に集中していた。
ボルディン＝サーラム。
麻薬組織の大物と、つながりがあるとの噂が絶えない少社の実業家である、人脈を絶縁しないというふれ込みの、新しいドラッグの開発・製造に携わっていると言われている、その金物を駆って、最近では、悪徳政治家にもその触手を伸ばし始めているらしい。ここ数日のうちに、その政治家たちと接触する可能性を、クロノスははじき出していた。
・・決して思い通りにはさせない・・・
決意を静かに胸に秘め、今日までボルディンの動きを追っていたのだった。

ホームで電車を待つ絶好のセフィリアは、青空を背景にして、眩々しいまでに美しい。
しかし、黒い影な自分の美貌が、自然と人目をひいてしまうことをセフィリアは知らない。
もちろん、ホームで獲物を物色していた暴漢たちの目にも、気づくことはできなかった

セフィリアの使命Ⅲ
（電車編）

絵・カーマイン
原作・札幌なかなか

セフィリアは、ボルディンを見失わないよう、隣のドアから電車に乗り込もうとした。

しかし！
セフィリアは今まで、このような満員電車になど乗った経験はなかった。

…はぁ…
言ってはいけないのでしょうけれど
暑なこと…

でも…
ここであの男を見失うわけにはいかない

スッ

ガッ

ドンッ！

その背中を、遠慮もなくつき押して、後から後から乗客が乗り込んでくる。

「あっ」

一度よろめいただけでは済まない。体勢を立て直す暇をおかず、押され続ける、胸が潰される。

発に発に、押し込まれる。

他の乗客の足を踏み、足の置き場を探すうち、両脚の間に他の乗客の脚が突っ込まれる。

気づいたとき、セフィリアは、伸びた片腕は乗客の身体に挟まれ、背の高い男と抱き合わんばかりに、その身体に顔を埋めるような形となっていた。

少し開いた両脚の間に突っ込まれた男の太腿が、セフィリアのタイトスカートを半分ほども捲り上げている。

そんなセフィリアの正面で、背中で、男たちはニヤニヤとした笑みを浮かべていた。

・・この女、どうやら満員電車は初めてのようだな。くくっ、結構じゃねえか・・・

・・こんな美形の女の身体を楽しめるなんて、今日はついているぜ・・

セフィリアを取り囲んでいるのは、ただの乗客ではなかった。

・・ボルディンは？・・

自由になる片腕を胸元に引き寄せ、正面の男との空間を確保して息をつくや、セフィリアはすぐにその姿を目で追った。

幸運にも、ボルディンは横を向いた正面だった。距離にして10メートル、いざとなれば、直接、目に見えなくとも、気配だけで様子を感じることもできる。

ボルディンは今、携帯電話を取り出して何やら話をしているところだった。

・・やはり・・今日は、何かあるのかもしれない・・・

セフィリアは、その口の動きに集中しようとした。

そのときだった。

セフィリアの身体に、予想だにしない異変が起こった。

初めての痴漢に対して、剣の反応も示すことができない。
いや、このような低劣な行為に、自分が何らかの反応を
することなど許せなかった。
平静を保つ、その沈黙には、いささかの変化もはられない。
しかし―セライリアもまた「女」であることは事実だった。
それも一般の、恋愛に明け暮れる普通の女性とは比較にならぬほど
男女のことには慣れも経験もない「女」であった。

教員の行動規範、そしてセフィリアの技量は、同僚の教員たちにとっては理想の体現者だった。
突出した理想の中では、微妙な身体の働きや反応で、その様子を感じ取ることができる。
一瞬だけ、その魅力的な唇に困惑を見せた、セフィリアの円熟いの表情。その身体に、何が起こっているのか・・・前方に、教員の目線を色っぽく伝えている。
セフィリアが、身じろぎもせず、平静を装っていても態度には一目瞭然だった。
・・・平気を装っちゃってよ・・・可愛いぜ、イヤらしいコトされてぶも出せないか・・・
・・・しかしまぁ、間近で見ると、濃い美人だな、たまんねぇ・・・
・・・どれ、俺もそろそろ、あの柔くて敏感そうな太腿を、この手に楽しませてもらおうか・・・
右側の男が、セフィリアの太腿に向かって手を伸ばした。スカートの中に手が差し込まれる。
ビクン！
不意に太腿を触られ、彼女の身体が軽く反応する。しかし、その表情は少しも変わらない。
・・・ほぅ・・・反応できないか、この女、お嬢様かァ・・・
平静を装い、自分の方を見ようともしないセフィリアに、男はニヤリとした。
無遠慮な手を動かし、スカートの中の太腿を揉み、奥まで這い上がらせようとする。優美しいおい女の太腿が、手の平に心地いい。
・おぉう・・気持ちいい手触りだぜ・・・ふふふ、いつまで平気でいられるかな？
男は、セフィリアの表情を見つめながら、ゆっくりとイヤらしく太腿を撫で上げる。
・・・くっ、痴漢ら・・・
新たな手の出現に、ハッとした様子のセフィリアは、対応を決めかねていた。
今は、すぐそこにいるボルディンを追っているのだ。教師の行動で、目立ったり、騒ぎになったりする可能性は極力避けるべきだった。そんなことにでもなったら、目も当てられない。
自然と、痴漢に抵抗することも、慎重にならざるを得ない。
しかし、スカートの中に侵入してきた手は、太腿を撫でながら、少しずつ這い上がってくる。
ビクン！
また、身が反応してしまう。無意識に太腿を撫でる痴漢の手が、時折、敏感なポイントに触れてる。
意識したくとも、〈女〉の身体が、痴漢の手を無視できなくなっていた。
・・・くっ・・煩わしい・・・
あくまで冷静な態度は崩さず、痴漢の手をスカートの上から軽く押さえ、制しようとする。やんわりと、男の行為をいなすつもりだった。しかし、男にはまるで遠慮というものがなかった。
押さえられたスカートの中で、無遠慮に太腿を撫で回す。その指先で、太腿の内側を刺激し、若い女の柔肌と反応を楽しむ。
・・・身体の方が、とうとう我慢できなくなったか？　へへへ・・ビクビクしやがって
・・・敏感、敏感な太腿してるじゃねえか、その平気そうな顔がいつまで保つか、楽しみだぜ・・・
ビクン！
今度、何度目かの、女の反応がセフィリアの身体から湧き起こる。
・・・くっ・・・また・・男の手が・・・
太腿から、男の手がスカートの中に侵入してくる。続いて、その後ろからも。
数本の手が、次に、続々とスカートの中に入ってくる。完全な防ぎようはなかった。
スカートの裾を摘んで、下に引っ張り、それ以上の手の侵入を阻むのが精一杯だった。
それでも、数本の手が突っ込まれたスカートは、太腿の半ばほど捲れ上がってしまっていた。
裾を押さえてはいるものの、その中では、何本もの手が太腿を自由に撫で、蠢いている。
・・・んん・・っ・・・
更に別の手が、セフィリアの胸を襲う。
セーターの上から、じんわりと柔らかく、お胸の膨らみを下から撫ぜられる。
その手は、親指と4本の指の間に胸の膨らみを収え、徐々に揉み込んでくる。ゆっくりと揉み始める痴漢の手。セフィリアの反応の様子を見ながら、膨らみの柔らかさを確かめている。
その手を引き剥がしたくとも、スカートから手が離せず、胸は好きなようにされてしまう。
・・・んっ・・・こんなにっ・・痴漢がいるなんて・・・
ボルディンを追跡するセフィリアには、一般女性ほどの抵抗ですら許されない。
胸をも弄ばれた小娘も同然だった。

無数たちの欲望にまみれたすが、
セフィリアの幼らかな
左右の太ももに絡みつく、
さわ
さわ
さわ
さわ
男達にしてみれば、
電車に乗り込むまでの間、
駅の構内で、ホームで、
数々に痴漢されつづけた
苦難だった。
ぶるぶる
・・・・・・!!
ドクン
鉄塔そのままに、子をベタベタと這い回らせ、唾々しい手触りを堪能する、
ドス黒を、多数の触手が這い回っているかのような感覚に、セフィリアは襲われていた。
無数の手に太腿を強で撫でられる度、敏感な神経が引き出されてくるかのような気がする。
――触れるとき――こんな――
セフィリアは戦慄とした。
触れ合うまで、一度も感じたことのない、身体の知れない恐れ。
敵として見られるのではなく「女」として見られることが、こんなにもが
恐れ、不安になるものだとは。
自分の身体が、隠れもなく「女」の身体であることを、セフィリアはいやが上にも
思い知らねばならなかった。

あなたたち何をするんですか！

やめなさい……！

ピクッ

……っ！

……あっ……！

ふふふ…そんなに嫌がらなくてもいいじゃないか

オジさんと仲良くしようや

緩み顔を隠しく、誇らな仕行ちに
抗しようとするセフィロア、
しかし、その恐とした表情から
ただよう全開気が、無理たちの表情を
一層、強烈に誘う。
すげえ
高級だな！
もみ
ビキ
ビキ
もみ
無理
駅で待ってるとき中から
目をつけてたんだ
もぞ
もぞ
脱ぎ捨てるときの顔
興奮したったぜえ

男たちは、美しいセフィリアの横顔をはつめ、ニヤニヤと笑いながら、ぐっと強く手を握りしめさせる。

セフィリアの身じろぎも虚しく、顔の付け根を、四肢を固定される。

美しい獲物を手めるように、

無頼たちは、顔を赤らさんばかりにセフィリアに群がった。

「姫ちゃんのお尻、小さくて可愛いとこに、深くまろかいんだなぁ。ふふ・・・パンティも、サラサラしていて気持ちいい手触りだよ、深く、オシャレなパンティをつけてるのかな？」

スカートを捲りあげた後ろの男が、下着越しのヒップをまろかく揉み解す。

ヒップの左の端は、はは完全に剥れ上がっている。

セフィリアは、小振りな顔の双丘が、下着のとから男の手に揉まれているのを感じていた。

歯軋を、音無無られているかのような感覚。　スカート越しとは、まるで比べ物にならない。

それに加え、上半身では、タートルセーター越しに、乳房を揉んだ男の手が回を編くように無で回している。

胸、太腿、ヒップと3カ所を同時に責められ、セフィリアは込み上げる声を押し殺す。

・・あっ・・んっっ・・・

全身たっぷりな男の指が、美しい曲線を描びたヒップをまさぐって動く。

羞恥心を煽るその触り方に、セフィリアは平静でではいられなくなっていた。

・・くっ・・だめっ・・

後から逃げようと腰を振っても、べったりと張り付いた手から逃れられるわけもない。

セフィリアは、翻弄されていた。

「そんな抵抗しても無駄、無駄・・・ほら、こう感じるだろ」

ヒップを責める男の指先が、後ろから膝の付け根にかかる、上質のラインを楽しみ、セフィリアの羞恥心を引き出すかのように、クルクルと内腿に円を描いなぞる。

後から、男の膝を突っ込まれ、セフィリアの両膝は開かされたままになっていた。

・・く・・くっ・・・膝を・・閉じることができない・・のに・・・

膝をキュッと閉じ、耐えるセフィリアを無視はいたとる。

「くくくっ、お姫ちゃん、どうした？　何だか顔が赤えているねぇ。この、顔の付け根の内腿が、そんなに感いのかね？　この辺かい？　それともこのラインかな？　姫様、姫様だね、ほらほら、もっと抵抗しないと、オジさんの指がお姫ちゃんの大事なところを、無が開けるほどグチャグチャに汚っちゃうよ、顔を閉じれないのなら、オジさんの好ようがままだねぇ」

身の毛のよだつようなことを、優しげに囁きつつ、両膝の間に指砂に指を進める。

さるやかなセフィリアの抵抗は、無頼の両膝をとけいに開膝するだけだった。

「うくっ・・」

顔に無頼と無頼を通じ、セフィリアは様く音を漏らせる。

中心部分に、無れてはいない、あくまで、間近を無膝したに過ぎない。

しかし、そこを圧迫する指は、絞とくギリギリまで、セフィリアの中心に迫ってくる。

・・いいぜじゃないか・・もっと感ずかしくさせてやるからな・・・

強い表情をまとられ、口調と、セフィリアを圧倒で無る指使に夢中になる、

「ほら、しっかり力を入れないと・・・スカートが破れ上がってしまうよ」

「たくさんはまれ続けて・・・可愛いオッパイが、隠り気持ちよさそうだねぇ」

無頼たちは、セフィリアを二重に羞そうと企る様子はない。

二重に羞すのではなく、少しずつ、じわじわと追い詰めてくるようだった。

・・女を楽しむにゃ・・・このやり方が最高よ、・・・まったく、惚れつきだな・・

・

美女を少しずつ責め苦の、羞恥と快感に同時させながら嬲ろう。

・・ふふふ、この女もな・・・

ろなめずりする。

ほろな指先は、セフィリアを、羞恥と快感に身悶えさせることに狙いをそめていた。

セフィリアが抵抗を続けるほど、男達は、彼らかなものを
彼らに対する興奮を、ますますエスカレートさせていく。
―ああ―そんなところを!
男の指が進むところ、甘い痺れが広がっていく。
気を抜けば、快感だと錯覚してしまいそうな―それほど官能的な痺れだった。
後ろでは、執拗的なヒップを狙う手が、その弾力とトガの手触りを楽しんでいる。
セフィリアの肉体に、次第の色が浮かび、次第に色濃く染ちていく。

ビクン！！・・・・

今までの数々の責められた経験によって、セフィリアのそこは、僅かな刺激を感じるだけで、ビリビリするほどの快感を伝える器官となっていた。

耐えきれない衝撃が、セフィリアを襲った。

白い喉を反らせ、崩れ落ちの目を小さく震わせ、

「ふうううう！・・・っ」

電気のような痺れが、セフィリアの脳を貫く。

身体を、痙攣、指で触られたかのような感覚がセフィリアを襲ってくる。

「あっ・・はっ・・はあっ・・・」

「ふふふっ・・・はら、ではこういうのはどうかな？」

衝撃の余韻がやまぬ内に、指先で、中央を軽く、横にスーッとなぞる。

「あっ！・・くううううっ・・・」

それだけで、脳がとろふると溶け、脳を軽い快感が満たしていることを伝えてくる。

軽く、触れるかどうかのソフトなタッチと、父の身体を知り尽くした、巧みな指遣い。

セフィリアに、抗しきれるものではなかった。

「2人だけで楽しくしてねえで、俺たちも混ぜてもらうぜ！」

後からも、新たな指が、セフィリアの秘部の奥に割り込んでくる。脳の付け根の辺りと性器する、無数の指。

「っ！・・・」

思わず、悲鳴と共にしてきた子宮を刺激が、全ての子を閉ることができるわけもない。

秘部の奥には、剥本もの指が割り込み、広げられた感覚が、その中心を広いなる。

「うっ・・ふうう？！・・・」

軽くとはいえ、何人もの男に、無数の指なく秘部をなぞられる感覚はたまらないものだった。

子宮を開まれた状況、秘部に挿し込まれた指を伝はじ、脳に伝わりつける。

「楽しくどきやるからよ、気持ちよくなりな」

フーク、フークと口を尖らせる男の囁きと共わせ、無数な指先が秘部を刺激する。

「あっ！・ふっ・・ううっ・・・」

耐えきれず、脳がビクビクと反応してしまう。

セフィリアの秘部は、いつの間にか大きく広げられようとしていた。

自分を抱く男の指遣に、性中を反らせ、腰の奥にじれったい、身体を震わせる。

同時に、脳の小指りな動きにも、脳に耐えきれない快感が伝わってくる。

「オッパイの方も、もっと気持ちよくしてあげるぜ？」

両側から動くみは、あっという間に周りの手で揉みほぐされてしまう。逃れようと抵抗が、

セフィリアの胸に広がり上げてくる。

ふふふ
たまらないのか？
特にここを
苛められると
たまらないだろ？
ぶるぶる
さわ
もみ
さわさわ
もみ
やめな…
さい…ッ！
さわ

切なく喘ぐ彼女の胸に、形でしこるものを見つけた男たちは
容赦なく胸を責めていた。
セフィリアの上半身が、胸の頂点を刺激する度から逃れようと、
激しくうねって揺れる。

胸を揉びながら、男達たちは、セフィリアの股間をそのまま
触ってさする。上着の中心に、微かにわかる小さなシミを指にうつし、
恥辱に満ちた声で囁く。
「ほら、ここがお嬢さんの大切なところだろ・・・
触られている気分はどうだ？」
「どうだ、美人さんだって、こんなイヤらしいコトされると・・・
濡れてくるんだろ？」
「そ、そんなことっ・・・」
セフィリアに残された抵抗は、口調だけだった。
しかし、その声にもなぜか、微妙な艶っぽさがまぎれているのを
男たちは見逃さなかった。
「そうかぁ？　おや？　それにしては何だか、ここ、
ヌルヌルしているようだなぁ」
男が、セフィリアの股間に差せた指を、ことさらに動らせてみせる。
「んっ・・うぅっ・・」
セフィリアの上唇は、サラサラしたお嬢りであるにもかかわらず、
内側から湧み出すヌルみによって、ヌルヌルとした感りに
変わっていた。
その様子を興味もなさる男たちの指を、熱く濡らしてしまう。
セフィリアは、恥れもなく濡れていた。

濡れてるぞ
おい…
無理矢理こんなこと
されてるのに
こんなに感んで
いるじゃねぇか…
すました顔してても
本当はイヤらしいこと
されるのが好きなんだろ
さわ
さわ
……！
違います…！
じゃあ
これはどうだね
ばっ
……っ！

こんな…
こと……

ぶるぶる

許されることでは
…ないの…ですよ…

もぞ
もぞ

グリ

もぞ
もぞ

こんなイヤらしい
コトされてるってえのに
おれ達の心配とは
お優しいことだねぇ

ますます気入りに
可愛がってあげたく
なるってもんだ

ガタン

ご希望ならベッドの上で
可愛がってあげても
いいんだぜぇ

ガタン

そんな…
下劣なことをっ…

「よぉたち、随分とお楽しみだが、美人さんがいうと、ゾクゾクするくらいイイ響きだぜ、私はそんなことに興味ありません、という響きがイイじゃねえか・・・じゃあ、もっとドスなことを、その身体に教えてやろうか」

「あっ・・何をっ・・んっ・・」

男たちの手が、セフィリアの口を塞ぎ、厭い舞子口を開け、

「んうううっ！」

「へへへ、随分と、色っぽいパンティじゃねえか、お嬢さんらしくてそそるぜ・・」

「匂いたぜ・・・俺、こういうの好きなんだ、興奮だよ・・」

男たちの荒編がザラつく中、後ろの男がセフィリアの耳に囁く、

「前から、後ろから・・・ふふふ、みんなで可愛がってやるぞ、美人ちゃんだ、この世の天国を味わわせてやろうな」

男たちの手が、伸びてくる、ひく可憐なお尻は、男たちの欲情と興奮に火をつけていた、

「へへへ、今までの興奮じゃあ、もの足りなかったんだろ？」

「嬢ちゃん、ハードなのが好きなんだな？　お望み通りに、責めてやるよ・・」

男たちの手が、割り込んだセーターの中で、小振りな乳房を揉みしだく、

セフィリアの舞子は、セーターを捲り上げて内側から露く乳本の手によって、もみくちゃにされ、次々と形を変える、

「や、やめ・・なない・・・」

「まだ、そんなこと言ってるのか？　ほれ、こんなにココを尖らせてるくせによ、ん？」

ブラジャーを突き上げる乳首を、指先で弾くように動かす、

ちっくりと膨らむ乳首は、他の責めに、ますます敏感さを増してくるようだった、

「んうっ・・んっ・・・」

「少しは社会に対したかい？　じゃあ、可愛いセーターの中をはせてもらおうか・・・ハード好きな奴隷さんを、たっぷり気持ちよくしてやるからよ・・」

男たちの手が、セーターの裏にかかる、手首を掴まれたセフィリアに抵抗する術はなかった、

「オジさんたちを楽しませてくれる子とは、ご挨拶を上げなきゃな」

後ろの男が、セフィリアの黒い髪を、くっと後ろ引せた、

それに合わせて、周囲の男たちもセフィリアを囲った、

セフィリアの、胸から腰に巻かれた手が、胸の付け根からパンティの縁にかかる、

「嬢ちゃん、はうはとの快感って知ってるかい？　これから味わわせてやろうな・・」

後ろの男の声と同時に、2本の太い指がパンティの縁から割り込んでくる、

「んうう――――っ！」

敏感な部分に、指が直接触れるのを感じ、セフィリアは激しく身悶えた、

・・あ、あぁっ！　だめっ・・だめっ！・・・

四の手入から逃げようと、腰を振るが叶わない、少し力を加えられた指が、胸が潰れるかさ

の勢に沿って強引に揺る、くにゅりと、指がめり込んでいく、

「あっ！　やめっ！・・・くっ・・ん・・・」

セフィリアは、たまらなそうに首をくねらせ振った、

熱く濡れた肉の中心に、指が埋められる、指が、その周囲に絡りつくだけで、胸がビリビリする、

「凄く濡れているぜ、ふふふ、オジさんの指はイイだろう？・・・」

セフィリアの、反論する言葉を封じるため、男はセフィリアを強く抱き締めていく、

上半身では、乳房のとがりがくっきりとげられたセーターから覗れた、

パンティと対揃いのブラジャーが、男たちの目を釘付けにしていた、

「綺麗なブラジャーしているんだな・・いいぜぇ、その姿・・・」

開口の浅きれを突き上げる、丸みのある谷間には、敏感な男たちの指が絡みついている、

後ろの男が、セフィリアのそんな姿に興奮気に、熱呼を吹き掛ける指を動かす、

お姉ちゃん
かわいいねぇ…
そんなに
気持ちイイかい？

でもまだまだこれからだよ…
まだお姉ちゃんの
入り口を見つけただけ
だからね

ほら…
中に入れる…

うくっ…！

グリ

ズッ

クチュ

「何も言えないくらい、気持ちイイのかね、
お姉ちゃんのココが、どんな具合に
なっているか、オジさんが確かめてあげるよ…」
「あ―く―っ―」
ずぶずぶと、身体の奥へ奥へと侵入してくる指に
セフィリアの顔はたまらず絶望する。
―ああぁっ！…
第1関節、第2関節…そして、ほとんど指の
根元まで止まる。
セフィリアの絶望は、男の指をその根元まで
咥えこんでいた。

「あ―　あ―…」
男の指が、体の内部でくねっている。
―こ、こんなことって―あ、あっ…
顔を打ちひしがれたセフィリアは、抵抗の動きを
止めていた。抵抗するどころではない
押し寄せる快感の波は、慣れないセフィリアに
とって大きなものだった。

ドクン・・・

不意に、セフィリアの身体の中で、今までにない強い脈動がおこった。

・・身体が・・何？・・・

妙な高揚感に、身体がふらふらする。

足が地に着いていない感覚が襲い、フワフワするような不安感がセフィリアを支配する。

次いで、強い酒でも飲んだかのような熱が、身体の奥から湧き起こる。

カッとした熱病のような大揺りが、上半身を揺動し、時をとともに全身を駆け抜け出す。

・・こ、これは・・・

「へへへ、どうしたんだ？　ふらふらしてるじゃねえか、感じすぎて、もう腰が抜けたかっ？」

「身体が熱いか？　アソコがズキズキするだろ？　くくくっ・・これ、何だと思う？」

男がだし出したものは、透明のカプセルだった。透き通った内部では、何かの液体が揺れている。

華奢な手袋が、セフィリアの胸に伝がった。

「これはな、人肌の体温と水分で溶けるんだ。強つか、お嬢さんの中で溶けてる頃だなぁ」

セフィリアの表情を探るように、男がニヤリとした。

「身体がウズウズしてるんじゃないか？　俺たちに可愛がってもらいたくなってきただろ？だ？」

「何を、馬鹿な・・ことを・・・」

足が軟くなり始めたセフィリアの強がりは、男たちを明らかだった。

はぁはぁと、肩で大きく息を始める美女の表情は熱っぽく、身体の中を駆け巡るモノを必死に堪えているようで、たとえようもなくエッぽい。男たちは、目配と表示熱くたぎるものを覚える。

「俺はじゃないかね・・・やはり、イイ女はそうでなくてはイカンよ、無理に陵辱されたら、オジさんも困るんだよ、もっと感謝って、オジさんを満足させてくれなきゃな・・・」

後ろの男が、パンチィに指を差し込んだまま耳元に囁き、耳朶を甘に含んだ。

「んんうぅぅっ！」

出らせた熱い吐息が、耳朶をなぞり耳の中に潜り込んでくる。

「あっ・・」

反射的の目眩にも、ゾクゾクとした甘いしびれの感覚を感じ、思わず声をあげる。

「美人さんの目眩は、やっぱりイイな、こんな風に、責められるのは好きか？」

横の男が、ひく細い目眩に指を挿め、勢いに吸き出る汗を舐め取る。

2人の沈の責めに、早くも、セフィリアは強烈な快感を覚えていた。

おい姉ちゃんの乳首すげえぞ…ビンビンじゃねえか

クリ

クリ

クリ

アソコだってスケェことになってるぞ

クチュ

クチュ

レロ

ビク

やあああう！……

指で犯されながら、あまりの快感に
声が抑えられそうにない。
「んうううっ!!!」
口が塞がれているのはかいだった。
秘部からヌルヌルと指が出入りするたびに
強い電気が身体を駆け抜ける。
脳髄まで痺れてくるようだった。
んんっ!!
ぎゅぅぅ
びくっ
クリクリ
びくっ
ビクッ
グチュグチュ
淫らな行為がセフィリアを高みに押し上げる。
秘部を犯す指の律動に、セフィリアは翻弄だった。
―あっ―あああっ―だめっ、ああああっ!
男達の前に耐え切れず、ビクビクと痙攣しながら
ついにセフィリアは絶頂に達した。

「もう、イクもまったのか？　まだまだ、これからだぜ？」
「ほら、どうした、どうした？　こんなもので降参していいのかね？」
性感の余韻に浸え、目を閉じ呼吸をキュッと結んだセライリアを、男たちは更に責めとげる。
セライリアを絶頂に導いやった男が、指を抜くやすぐに、隣の男が自分の指を挿入させる。
後ろの男は、パンティをお尻までずらし、張りのあるヒップを直接揉で回している。もう片方の手は、その胸にある乳ひらをかと。
セライリアは、絶頂を迎えても容赦に責かうことは許されなかった。
「んう・・っ・・う・・」
首は、男たちの指に、身体をくねさせられ始める。
女に手慣れた男たちは、どこまでも執拗だった。

セライリアの中心と突き立つ乳首が、ヌラヌラとテカテカに興奮を高いている。
その頃には、パンティの縁を、横にずらして差し込んできたたくさんの指が、動くところ次に帰けた胸を揉み回す。
「あっ・・うんっ・・・」
女言いするような快感に、セライリアの腰がくねる。白いお尻が誘を出しとなったその奥では、観衆たちの指が、セライリアの甘い蜜を求めて蠢いっていた。無理させられた胸には、乳房に沿が迫い、無数の乳首に口が吸い付いている。苦いなりは、男たちの口の中で舌に弄られ、セライリアの性感を休むことなく刺激していた。
「あっ・・あっ・・」
「くくくっ、強い感じ様だな、この感はよ、凄く感じるらしいぜ、お姉ちゃんのような美人さんを、いっぺん犯わしてみたかったのよ、どっか、ホテルに行こか？　興奮させてやるぜ？」
男たちの言葉責めが、優さを増す。セライリアはもう、抵抗の口を上げることはできなかった。
父父と結婚が身体に刺り、全身が敏感な性感帯となっていた。
「そーら、そーら・・・どうやって指を動かすと、凄いだろ・・・姉ちゃんの中から、熱いものがどんどんと溢れてくるぞ、ここは、もうグチャグチャだなぁ・・・」
興奮の証拠なパンティは、今や、くしゃくしゃに股を覆っている。パンティを、引き上げなかが力の込んでいる手がくねると、セライリアの腰にキュッと力が入る。横から横から、数本の手がパンティの中と潜り込み、女の部分をえぐっている。
気が遠くなりそうだった。
・・こ、こんなとっ・・・
セライリアは嘆いた。
「だめっ・・やめて・・・」
男の手首を掴み、押し返そうとするものの、まるで力が入らない。
無様な抵抗に、男はせせら笑った。
ねじ込んだ指で、膣を強引に広げ、奥の奥まで丸く円を描いてこね回す。
黒い性感が、ビリビリと脳に響き、セライリアは悲鳴と白い喉を反らして声をあげた。
「あうぅっ・・・」

なんだこの尖りはよ

ギュッ

こんなにかたくしゃがって

くくくっ…敏感なところに当たっているようだねぇ

……ッ！

いやあああっ…！
ん!!
ぶる
ぶる
ビクッ
ビクッ
グチュ
グチュ
ビクッ

はぁはぁと大きく息を上がり、セフィリアは
あっけなく2回目の絶頂を迎えた。

「まだイってもまったなぁ？　よほど、こいつが好きとはえる」
「まだ、まだだ。もっと気持ちよくなりな・・・まだイかせてやるぞ」
男達たちに、前の穴をを責める様子はない。
太くがっついた指が、膣壁を擦るだけ、くちゅくちゅと音をたてながら
いている。
その横では、膣壁を擦るでは太く指が、内部を激しく刺している。
上半身では、くったりと床に寄りかかるセフィリアの胸を、男たちはいじ
ようにもみ。
「はぁう・・うぅっ・・・」
「おい・・こいつイキっぱなしだぜ！」
セフィリアは、今や、絶頂の連続だった。
理性が吹き飛び、白濁が口く端のきそうになるや、全身が痙攣したまま
男たちの責めを受け続けた。薄まいはとの絶頂に、セフィリアの意識は朦
朧だった。

絶頂を迎えるほどに、身体がいうことをきかなくなってくる。
逆してしまう度に、より深く、刺激が染み渡ってくるのを、セフィリアは自覚した。
踏み入れてはいけない危険な世界と知りつつも、どこまでも甘美で、身を焦がす誘惑に駆り立ててくるその力は、秒刻みで大きくなってくる。
・・これ以上は・・・危険・・・いけない・・・
溺れそうになる意識の中、気を奮い立たせたセフィリアは、決断した。

・・一瞬で、痴漢を気絶させる・・・
貫手の体勢をとるセフィリアの指先が、ピンと伸びる。
・・まずは、左右の痴漢を沈黙させる・・・
人間の急所、眼に狙いをつける。
痴漢行為に没頭する男たちが、気づくわけもない。声も出せずに昏倒するはずだった。
そして、今まさに打ち込もうとしたその瞬間。
・・誰かが見ている！・・・
セフィリアの瞳が警告を鳴らした。自分に向けられる鋭い視線を感じ、瞬間的に、貫手の体勢を解く。鋭い視線はまだ続いている。気のせいではなく、明確な意志が感じられる。
・・一体、何が・・
セフィリアの思考が、めまぐるしく回転する。全ての車両に乗り込み、警察関係の人物に目を光らせているはずの、ボルディンの視線という線が強い。いや、この車両の乗客自体が、多数の視線で監視されていることも考えられる。
ならず者たちを屠っておき、指定された電車に痴漢・痴女として乗客にしかける。
大人しくしていれば良し、警察だと分かれば・・・
普通の女と変わる動きをすれば、すぐに警戒されてしまう。
・・それが、狙い・・・
セフィリアは、手を緩りしめた。
今までにない、快感の大きなうねりが押し寄せてきたのを感じ、身体が震えてくる

またまた
イクんだろ？
イケよ…へへへ

言ったろ？
何度でも
イカせてやるって

ビクッ
ぶるぶる
ムニ
ムニ

…ボルティン…あの男だけは
絶対逃がさない…

膝を行ち込みたいという
衝動に支配されながら、セフィリアは目を閉じた。
…できない！
自分は何のためにこの場所に来ったのか、
この男達を捕めつけたところで、凶悪を通して
しまうことになっては何もならない。
セフィリアは冷静した。

ん っ……!!
ビクッ
もみ
もみ
ギュッ
ビクッ
クチュ
クチュ
クチュ
グッ

１０分後・・・

豆電球となったセフィリアを追求から降ろし、傭兵たちは宵闇でホームを歩いていた。

「姉ちゃん、今からホテルで好きなだけ楽しもうぜ」

今日は、久々に最高な一日となるはずだった。しかし、そんな男たちを待ち受けている一人の男がいた。

「その女は俺がもらおう」

「なに！」

唐突な要求に、傭兵たちが一気に騒ぎ立つ中で、はっとした紳士の男が仲間を制する。

「駄目だ、やめておけ、厳い主だ・・・それに周りを見てみろ」

周囲には、数人もの男たちが、こちらを睨うようにして立っている。傭兵たちに戦慄が走った。

「す、すまん・・知らなかったんだ・・」

「いい心がけだ。長生きできなくなるところだったな。これからも、女を楽しみたければ、分というものをわきまえておくんだな。ボルディン様の慈悲を忘れるな」

表情を変えもせずに一瞥した後、セフィリアを軽々と抱え、男は何処かに歩き去った。

クリムゾン コミックス

大好評発売中！！

蝕み　1～4

迂闊にもクリードにつかまってしまったリンスレットは、手下たちの快楽の拷問によってそのプライドを蝕まれていく…。

愛のコケラくず

召喚士になることを告げるためにルールーの部屋に訪れたユウナを待っていたのは陵辱の宴だった。はたしてルールーの真意は？

翻弄する魔道士

ブラックマジシャンガールの悲痛な叫びは洗脳された師匠に届くことはなかった…。

玉虫色の天使

陰陽連につかまった壱与。縛足の復讐をうける操。キルバーンの罠にかかったマァム。三本立てジャンプオールドキャラクター本。

呪われた巻物

いまだ解放されない壱与。ダイの目の前で侵されるレオナ。キョンシーたちの拷問をうける道満。ジャンプオールドキャラクター本第二弾。

晴天の霹靂

出来心でユウナを苛めたリュックはルールーの逆鱗に触れてしまい、
自ら用意した道具で淫らなお仕置きをうけるはめに。。

アスミの碁　1～2

プロ試験当日　卑劣な罠にかかった奈瀬は大勢の痴漢に囲まれて…。

伸縮自在の愛　1～2

幻影旅団陵辱本。

あなたが望むなら私何をされてもいいわ　1～4

クラウドを救うため単身で神羅の地下施設にのりこんだティファの
長い受難を描いた長編作品。

セフィリアの使命Ⅲ
（ホテル編）

絵・カーマイン
原作・札幌なかなか

雑誌を、帽子などを脱いだ一人前の紳士として扱い、その中央に浮くそびえるホテル。

そしてこの日、その最上階では、非常識の夜景を一望に見下ろし、3人の男たちが談笑していた。

ボルディンと、黒い瞳の絶えないながらも強い力を持つといわれる産業家たちだった。

「・・・まったく、本日は、お忙しいところわざわざいらっしゃいましたね、ありがとうございました。それはかりか、今度の商品についても深い理解と満足への結論のご配慮をいただけるとは、感謝の言葉もありません」

ソファから立ち上がり、深々と頭を下げるボルディンに、3人の男たちが大柄な身体を揺すってこたえる。

「ははは、まったく、お前は結構上手い男だな。しかし、まあ、善良な市民のために働くのが、我々の仕事なのでな。気にせんでよい。それより、これからはよろしく頼むぞ」

「無論でございます。おふた方のお力添えで、さらに高効率ができるのです。売り上げの中から十分なお礼はさせていただく所存でございます」

絶対、力を発揮に伸ばしてきたボルディンの財力は、3人の産業家たちにとっても魅力あるものだった。それが、ちょっと面倒をしゅくしてやるだけで、礼として金をとっずと言ってきたのだ。ボルディンが、ざっと説明した金額は、莫大額のものではなかった。

「しかし、それだけではないのだろう？　ん？」

産業家の一人、サラザールが好奇心のような笑みを浮かべる。

金と権力にものをいわせて、美女をモノにするのが何より楽しみな3人の男たちは、ボルディンのいう「商品」の説明にも目を付けていた。

「これはこれは、見抜かれておりましたな。お楽しみは、後にと思っておりましたが、では、センセイ方には、商品の説明といきましょう。十分に、ご満足いただけると思いますが」

はあ
はあ
はあ
はあ
はあ
はあ
……

「おおう・・・」

ボルディンの部下に連れられ、1人の美女が姿を現すと、2人の男は一様に感嘆の声を漏らした。

女は後ろ手に縛られ、身につけているのは純白の下着だけという姿だった。

光沢のある、上品なデザインのブラジャーとパンティには、繊細なレースがあしらわれ、女の美しさを際立たせている。

魅力的な胸の膨らみ、無駄のない腰のくびれ、細く長い脚、ほっそりとした印象を与えながらも、豊かな色気を醸しだしている身体つき。

しかし、それにも増して、男たちの目が奪われたのは、その美しくも気高い表情だった。

切れ長の目はしっとりと潤みを帯び、瑞々しい唇からは、熱い吐息がそこはかとなく漏れている。胸の膨らみが、何かを求めるように、大きく上下しているのがわかる。

清楚な美人といった顔が、ただそれだけで、妖艶に男をそそり誘ってやまない色香を振りまいていた。

女が、ソファに座る男たちの目前を一周する間、男たちはその全身を仔細に観察する。

うっすらとした香りまでが漂ってくるようだった。

極上の美貌を持つ女・・・セフィリアは、男たちに見られながら、全身を焼かれる羞恥の痺れと、湧き起こる熱い疼きを必死に堪えていた。

[illegible]、ドートンが質問する。

「これは何と・・・凄い美人だな。一体、どうしたのかね？」

「気に入っていただけましたかな。では、私の趣味のご披露といきましょうか・・・」

縛った手首を引っ張られ、ボルディンの膝の上に座らされたセフィリアは、すぐにその柔らかな胸を揉まれ始める。

「うっ・・やめ・・っ・・んっ・・」

身を「く」の字に折りくねらせて、胸を揉む手から逃れようとするものの、後ろ手に縛られていては身動きもままならない。

媚薬が回った身体には、ただそれだけの男の愛撫にも狂おしい快楽が込み上げてくる。

セフィリアは、自分の身体が、意思とは関係なく熱く火照り始めるのを感じていた。

「はっ・・はあっ・・んっ・・・はあっ・・」

次第に、熱い吐息に小さな喘ぎ声が混じり始め、男たちの耳を刺激する。

ご覧下さい
これが私の商品の
効果というものです

どのような女でも
我慢したり耐えたり
することはできません

ビクッ

もみ

もみ

ビクッ

なるほど
大した品だ…

ニヤ
ニヤ

しかしまだ
よく分からんな
もう少し
見せてもらおうかな

これは失礼
しました

ダッ

これは失礼しました

あっ！

バッ

ついに、その股間を、ボルディンの両手が覆い始める。
押しつけられた太い指が、パンティに食い込み、その中心を微に何度もなぞり動く。
「んうううっ！」
今まで、何とか堪えていた官能の火が、一気に燃え上がり始める。
白く細い太腿を引きつらせて、セフィリアは喘いだ。

「あぁっ、はぁっ・・」
ブラジャーの上から乳首を摘み、弾かせた股間を押し、ボルディンは楽しそうに男たちに話しかける。
「いかがですか、私の商品の素晴らしさが、分かっていただけましたかな？　もちろん、直接手にとってご賞味なさりたければ、奥に部屋も用意しておりますが？　ごゆっくりなされませんか？」
もとよりそのつもりの男たちには、異存もなかった。
「ほう・・なるほど、確かに、この品は味見をせねば、見ただけでは分からんからな・・・よし、いい味かどうか、じっくりと見定めてやろう。部屋を用意してもらおうか」
「ありがとうございます」
交渉は、完全に成立した。

両手を束ね、ベッドの上方に手錠で固定された美女に、男たちがゆっくりと迫る。
身動きできない女をベッドで囲るという倒錯感は、男たちの欲望に火をつけていた。
「ふふふっ、今から、この両が直々に味見をしてやる・・」
しなやかな美女の肢体に、舌なめずりをする。
片手でネクタイを外し、服を脱いでセフィリアに跨む。
腕を上に上げ、下着姿でベッドに横たわるセフィリアは、この上ない美しさだった。
「いや・・来ないで・・」
両腕から身を隠すようにピッタリと太腿を閉じ、切なく男たちを見つめるセフィリアに、男の一人サラザールが、そのとき思いも寄らない言葉を口にした。

……
ギシ

「抵抗する美女を、味わるのも格別じゃないか・・なあ、セフィリア姫？　こんなところで会うのも白状だが、相変わらず凄い美人ぶりだな・・ゾクゾクするほど、可愛い姫だ・・」

瞬間、セフィリアの顔が凍りつく。

「誰も、知らないとでも思ったのかな？　ずっと前のことだが、セフィリア姫は決してはれんだろう、そのとき、俺はただのつまらん1遍民だったからな、しかし、いつか相手を乗いたい美人の顔は、忘れないのが特技でね、お姫でろ日は、今までのリもきめて2日は楽しめるというものよ・・・ボルディンを最高の機嫌を示し出したものだ・・」

「ほう、お嬢ちゃんが、あのセフィリア姫ですか？　昔には聞いておりましたが、何ところ日はどまでの美人だったとは、すると、お嬢ちゃんは、あの恐ずくめの機嫌を引っていたのですかな？　姫だ金無様するだけで、興奮しそうですなあ」

ドートンが楽しそうに相づちを打つ。

「さあ・・今夜は2人で、セフィリアちゃんをたっぷりと可愛がってあげましょうか・・」

セフィリアに近づく男たちの顔が、ぞうぞうと二種の好色さを帯びてはえる。

その表情は、天を呼く勢いでうなりの笑顔が、熱く輝を打っていた。

ベッドの上のセフィリアに、覆い被さるようにして2人の男がにじり寄る。

「まずは、ゆっくりと・・・全裸の、セフィリア姫のオッパイを触らせてもらおうか・・」

「や、やめて？　触らないで！」

「くくくっ、さぞ無念でしょう？　手錠をつけられては抵抗もできますまい？　抵抗できない女が、オッパイをモミモミされるときの顔が、私は大変に好きでしてな・・・さて・・」

男たちは、左右両方から、ブラジャーに収まれた胸の膨らみに手を伸ばした。

「うっ・・・・・いや・・」

大きな手が、ブラジャーの上から胸に触れた瞬間、セフィリアは思わず顔を逸らした。

まるかく柔肌を包み込んだドートンが、セフィリアの表情を楽しみながらゆっくり

う。

「どうかしましたか？　時の美人ともあろうお方が、こんなもので感じってどうします？　それとも時の美人というのは、クロノスの伝説アイドルか何かですかな？　人気モデルとしては、確かにビカイチの実力ですよ・・セフィリアちゃん？」

じわじわと攻撃をかけ、テクニックを駆使して女を責め、抵抗する・・・それが、抵抗派ドートンの女の楽しみ方だった。

・・・私は、時の美人・・・ふー、セフィリア・ロアークス・・・

セフィリアは、自分に言い聞かせるように自尊を取り戻し、男たちのイヤらしい責めに抵抗しようとする。

クロノスをバカにするのはやめなさい…

ギシ

許しません……!!

スッ

スッ

ペロ

ペロ

ほう…どう許さないというのかな？

時の番人だとはいっても身体は女……

好きなようにされてどこまで耐えられるか楽しみにしているぞ…

サラザールの片手は、鷲掴みにした胸を揉みしだく、ドートンも、揉み込んだ胸を、やわらかく揉み始める、みるみるうちに、顔を歪めるセフィリア。
もはや、逃れようのない快楽の責め苦が始まろうとしているのを、セフィリアは悟った。

口端から涎、肌に汗を滲ませ始めるセフィリアを、サラザールが、満足げに眺め上げる。
ドートンは、ブラジャーの頂上にうっすらと浮き上がった小さな突起を、意地を込めて見つめていた。女を、それもこのような女を無理やり屈服させていくのは、堪えられない快感だった。
「ふふふ、何だか、ここが硬くなっていますなぁ・・・これは一体、何ですかな？」
その突起を、指の腹でゆっくりと円を描くようになぞる。
ぴくっと胸が震え、指から逃げようと動くが、ドートンの指はどこまでもついていき、執拗になぞり回す。
「うっ・・んっ・・」
「これこれ、これですよ。随分と硬くなって・・この尖りは・・何ですかな？」
乳首を軽く摘む時、唇をぐっとひそめるセフィリアの表情は、ドートンの嗜虐を更に誘う。
ドートンは、顔を背けるセフィリアに、自分の顔をぐっと近づけた。
「これですよ、これ。こんなに硬く尖らせて・・・この中がどうなっているのか、見せていただきましょうか・・」
「あっ・・」
ブラジャーの片方のカップを、ぐっとたくし上げる。
思わず声を上げたセフィリアの片方の胸は、薄桃色の乳首まで男の目に晒されていた。
無遠慮な男の手のひらが、丸い乳房を撫で回し、指先で乳首を転がす。
「綺麗なオッパイが、丸見えになってしまいましたねぇ。白い胸に桃色の乳首・・・。綺麗なものをしていらっしゃる。ふふふ、しかし、クロノスのセフィリアともあろう人が、男に弄られたくらいで、ここをこんなに硬くしていいのですかな？」
セフィリアは答えない。
頬に朱を走らし、乳首を摘み転がす男たちの言葉から耐えようと、目を瞑っている。
ギュッと結んだ唇。
屈辱に震えるセフィリアの、精一杯の抵抗だった。

サラザールが、手の平を、カップの横から内側に滑り込ませて蠢く。
「どれどれ・・・これか？ 本当に硬く尖っているな、これが感じるのか？ どうだ？」
カップの内側で、指先が、こりこりと乳首を摘み転がして淫らに蠢く。
「ん・・・っ・・・」
ギュッと結んだ唇から弱々しい吐息が、微妙に聞えてくる。唇が開いて熱い吐息が、今にも漏れそうだった。
男たちは、ニヤニヤとセフィリアの表情を見つめる。
「それにしても、お美しい・・。どうです？ いっそのこと、私の愛人になって本当のアイドルになりませんかな？ 本当に何でも出したら、男どもが群がって大変でしょうなぁ」
「それとも・・クロノスのジジイ連中に、毎晩こうやって可愛がられる方が好きなのかな？」
「馬鹿なことを言うのもいい加減にしなさいっ・・私は、そんな女ではありません・・」
あまりに無礼な言葉に、セフィリアの目つきが鋭く向いた。静かな、怒りに満ちた目での返答
る。
しかし、それすらも、男たちにとっては女の楽しみ方の一つだった。
「そう、その表情、いいぞ。以前、見ていたときも、そんな顔をしたときがあったな。あのときも、この胸元をぐっと開いてやりたくてたまらなかったもんだ・・・こんな風にな」
サラザールが、もう片方のブラジャーを、ぐいっと横に開く
張りのある膨らみが露出し、ツンと尖った乳首が顔を覗かせる。
「くっ・・・」
口惜しさと怒りが混じったセフィリアの表情に、サラザールは抑えきれないものを感じた。
「そして・・胸を開いたら、こんな風にしてやろうと思っていたのを知っていたかな？」
そう言うと、剥き出しにしたその胸元に、舌を這い回らせる。乳首を舌先に、柔らかく転がすか
舌を絡みつかせ、舐めたてる、薄桃色の乳首に、ヌラヌラとまとわりつく舌が蠢いた。
「う・・・くっ・・・卑劣な・・」
顔を歪めながらも、凛とした表情を崩さずにいるセフィリアに、男たちの表情は嗜虐
ようとしていた。

ピチャ
ピチャ
んっ…！
ビクッ
ビクッ
ピチャ
・・・・・・!!

間にのる男達の荒い通りにはなるまいと
セフィリアは唇び野をギュッと結ぶ。
しかし敏感に晒れる身体は、
男達の舌の愛撫に耐え切れるものではなかった。
甘美な痺れが脳に伝わり、
堪えなる吹奏が狂おしく湧き起こり始める。
――くっ――この程度の――ことで――
そう自分に言い聞かせるものの、
熱を持った身体はじっとりと汗ばみ、
こみあげてくる官能にシーツを握り締める。

ドートンが、セフィリアの上半身に目を向ける。ぴったりと服を張りながらも、快適に揺えくねる上体と胸、白くふくよかなパンティが、ドートンの目に強烈に映る。

「ほう・・・・これはまた、刺激的だな・・・くくくっ。どれ・・」

「あっ・・何をっ・・」

上体にかけられた手に、抵抗への強ら女男の意思を感じ取り、セフィリアが振動した目をとがる。

「なるほど・・興奮なセフィリア嬢を、もっと乱れいたくなりましてな。美女のココを、好き放題に責め嬲すのは、まったく味えられんものでして・・・。まあ、活発な好きともいいますが。さて・・セフィリア嬢のココは、どんな味がするのですかな・・」

最後の方は、後ロのように囁きつつ、セフィリアの胸元の間に手を滑り込ませる。

「あぁっ。そんなことっ！　待ってっ！　いや、いやっ！」

柔肌を上げ、逃れ逃げようとする胸元を、ドートンは押さえ込みにかかる。

しかし、手を掴まれ固定された身体ではどうしようもない。

「いいではないか、ドートン嬢のご慈悲だ。諦めるんだ。気持ちよくしてもらえるぞ」

サラザールが、甘ったるんだ言葉を囁きつつ、セフィリアの白磁に手を触れて撫で上げる。

セフィリアの太腿は拘らと上げられ、足元は激しくみを切るばかりだった。

セフィリアの太腿を撫み上げて左右に押し開き、ドートンはその中心に顔を近づける。

広げられた股間は、内側から溢れ出す蜜で、可憐な上唇をぐっしょりと濡らしていた。

「あぁ・・・いや・・・」

羞恥心に顔を紅潮させるセフィリアに、ドートンは満足げに囁く。

「ふふふ・・・イヤらしい蜜がですよ、セフィリア嬢。恥ずかしいですかな？　美女の恥ずかしがる姿は、いい、そそりますな、やはり。女性はそうでなくてはいけませんぞ・・・。くくくっ。しかしセフィリア嬢は可愛い。恥ずかしがりなから、もっ、こんなに濡らして・・・。くしょくしませはないですか・・・いいそですな・・」

ベンチィを通じてうらすと、セフィリアの感覚が伝わるとろなく興奮は高まっていく。

「ほう・・・これは・・蜜と香々しい・・。セフィリア嬢は、本当に可憐しそうですな・・」

ドートンは、溢れ出る蜜を舐めとるんばかりに口をつけ、唇に吸いた。

くっ!!
ギシ
ビクッ
クリ
クリ
もみ
もみ
ビクッ
ギシ
ニチャ
ニチャ

その瞬間、後に電撃をかなに感じたセフィリアが、背中をのけぞらせて悲鳴をあげる。

無防備にべったりと口を開いた状態のドートンは、セフィリアへの攻撃を再開する暇いて、ぶるぶると全体をぶるぶると震わせ、崩れる寸前をすする。

・・こんなことっ！　いやっ、いやぁぁっ！・・・

パンティを剥かれ、その内部を男に眺め回されるなど、男性経験のない女にとっては、耐えられるものではなかった。

しかし、全身をなくす男の心は汚みに満ち、セフィリアの性感を次々と責り出しそ

いく。

男の舌がその部分に触れるだけで、背筋に電気が走り、セフィリアの身体はビクン

ビクンと跳ね上がった。

たとえようもないほどの、強烈な屈辱と快感にセフィリアは狂いそうだった。

「いやぁぁぁ！っ！　あっ、あっ、だめっ、だめえぇ！！！！っ！」

手足で突かれた身体全体をよじって、その責めから逃れようとする。

しかし、ドートンは、がっちりと抱え込んだ上体を離さない。

上体を揺み、力強く押し開き、ますます強く口を押しつける。

分厚く温かい男の舌が、敏感をえぐり始めようとしていた。

熱く柔らかいモノが、体の中を、内部に忍み込んでくる。

「あぁぁぁ！！！！！っ！」

中に浮いた長い脚が、激しく痙攣するように動き、セフィリアはついに絶頂を迎えた。

ドートンの舌責めは執拗だった。

「いや・・・もう・・・やめて・・」

身を捩り、体をくねらせ、離れようとするセフィリアを押さえつけて引き寄せ、更に奥までを侵入させる。

「そう、嫌だなんてもといってはないですか、ふふふ、僕くはと楽しませてあげますよ、セフィリア姫のココは・・・まったく、芳醇ですな、美味らしい・・・涎がとまりそうですぞ」

グチグチと響く音の合は、どこまでもセフィリアを追い詰め、甘い笑を漏めすする。

「あっ、あっ！・・・あぁんっ！」

セフィリアは、制止する暇もなくなられず、唇だけでなく上半身を左右に激しく揺った。

その上半身は、サラサールの絶え間ない愛撫を受け続けている、次回への期待は、惜らな印象となって結果に表わり、ドートンから受ける舌責めの快感を増幅させてしまう。

二人の男の、ねっとりとした攻撃に、身体がとろけそうだった。

どんなに暴れても逃れられず、次の責撃と愛撫を、胸と股間に受け続け、セフィリアの顔が緩かく崩れる。

ビクンッ!!
ペロ
ギシ
ピチャ
ピチャ
ビクッ
ギシ
—ちょ—ちょ—もう——
無理矢理に高みに押し上げられていくのが
どうしようもなかった。
「んくぅぅ—!」
両手の拘束に耐えられず、
セフィリアは無防備の体勢に呼吸を乱みしめた。

「元に戻ってしまうかもしれませんなぁ、セフィリア様、しかし・・セフィリア様は、一体、何時イッてしまったのですか？　よほど、ココを責められるのがお好きと見える・・・・」

セフィリアを見たかと思えば、ドートンはイヤらしく笑う。

ねちっこい愛撫で、彼女を喘がせ、興奮もイカせるなど造作もないことだった。

「くくくっ、では、サラザール様にバトンタッチといきましょうか・・・・そうそう、彼は、彼女のファンでしたな、もしかしたら、彼以上の興奮を与える方で、たっぷりと満足させてくれるかもしれませんよ・・楽しみですな・・」

「ふっふっふ・・・冗談です、イヤというほどイカせてやりますよ・・」

サラザールが、ドートンに応えるように言う。

未だ絶頂の余韻に浸れるセフィリアは、目の前の男が入れ替わるのを、遠い世界のような面持ちで聞いていた。

顔に張られた両手が、
白いシーツの上に横たえた、顔から伸びる長い髪、
ベッドに寝っ転がし、はぁはぁと息をつく全裸の女、
下着姿のまま、全身には覆いていないものの、それだけに様を立てられるものをサラザールは強く感じていた、顔から溢れ出るほどの、艶めしい表情を強くヒップ、目を奪う、

「ついに、この男に来たか・・」

サラザールは、横目の笑いを浮らし、うつ伏せになっているセフィリアの顔を近でさせ、顔を高くとりさせる、

顔を強く引け、白分の右とヒップを突きたしと思ったは、全に無防備だった、
白いパンティに覆われたヒップライン、くっきりとサラザールの目の前に浮かび上がる、
たくしとけられ、ほとんど脱げかけたランジェリーからは、丸い右目を覗かせている、

顔上の顔をと引えた、
「あのセフィリア様の、こんな表情が見られるとはな・・・くくくっ、いい顔じゃないか」
今まで、誰もを挑発を続けていた女の誇らかなポーズに、何よりも快感を覚えるな、
パンティに手をかけ、太腿までくっと引きおろす、
「あっ・・・」
顔の真い丸いヒップが現わになり、その奥に今まで隠されていた女の部分が、完全に露わ
になる、サラザールは、静に視線をその中心とは定めた、
たまらない程の眺めかしい眺めに興奮しつつ、サラザールは、セフィリアの太腿を開ゑ広げ
ようとした大きく開く、セフィリアの中心は、十分すぎるほど濡れ光り、男の来訪を待っていた

「いや・・こんなの・・・やめて・ください・・・」
いくら好の美人といえど、セフィリアは女であった。
胸つんぬいで、男と対かって勝を分けるかという様ちなポーズをとらされ、恥辱のあまりに目もくらむ思いだった。
「セフィリア姫様、どれだけの武勇の達人かは知らんが、勝負は女よ・・・恥ずかしいだろ？　そして・・その恥ずかしいことをされれば、感じてしまうのが女・・・・ふふふっ、こんな、美麗らしい身体をしているんだ、男に嬲まれば、当然、こうなる・・」
サラザールの長い舌がおさまると同時に、勢く丸った乳首が右ひろを縦き分け、ヌルヌルと侵入してきた。
「くううっ・・・」
声にならない音を漏らし、セフィリアは首を振って身悶えた。
「あ・・うっ・・ん・・っ・・」
逃らせた乳が、無様にヌルッとおしこまれ、甘い蜜を滴き出そうと動く、サラザールは、セフィリアの顔をますます大きく広げ、そのヒップに顔を埋め、ねしゃぶりついていた。
この美しいセフィリアを手にかけ、思うがままに汚すことがサラザールの最望だった。
舌で舐ぶく様を見せ、容赦なく責れる姿をすする。
身体の敏感な部分を嬲き嬲される羞恥に、セフィリアは耐えた。
「ううっ！」
千度だ、ビリビリっとした電気が脳を貫け。
「ほう、美麗な顔をして、やはりセフィリアもココが感じるか？　たまらんだろう？
では、ここを徹底的に責めてやろう、ウブなセフィリア姫には刺激が強すぎるかもしれんがな・・」
サラザールの舌は、単を敏感な身を責えていた。
今まで降えてきた感覚とは別は、セフィリアを狂わせることに専念されようとしていた。

「あっ、あっ、だめっ、そんなところっ・・しないでっ！　あっ！」
セフィリアの抗う声に構わず、その豊ろみの胸胸をグルグルとなぞり、突つく。
舌の動きに合わせて、ひくひくとセフィリアの腰が動く。
「い、いやっ・・うくっ！・・・あぁっ！」
感じるか？　凄く感じるだろ？　わかっているんだよ、女の身体のことはな・・ほら・・」
絶頂は、もうすっかりグチャグチャだった。
サラザールは、ふっくりと膨らんでいる母に舌を巻わし、強く押しつけて前ゆうかせる。
小さな母は、舌先に横ルから押し上げられ、興奮もとがたりに動かされる。
「はっ・・あっ・・」
セフィリアの声が小さく、しかし長く、断続的に漏れる。
胸つんぬいの手は、母を絞る絞るにシーフを動み、強と上腕がビクン・ビクンと動く。
「ふふふっ、ココを責められるのはイイだろ・・・・では、強く責われたらどうなるかな？」
「くううううっ！！」
野に強まれたかと思うと、強くその部分に吸い付かれるのを、セフィリアは感じた。
・・こ、こんなにとっ！・・・・
セフィリアには、強烈すぎる快感だった。上腕がガクガクと震える。
「んうっ！・・・・っ・・んっ・・」
全身を痙攣させ、セフィリアは、気に狂り始めた。

…っ
!!
ビクッ
ミシミシッ
ギシ
ギシ

「はぁっ・・はっ・・」

強烈すぎる快感の波は、容赦には程かず、セフィリアの身体を駆け抜けている。

ビクビクと小きく痙攣するセフィリアを見下ろし、サラザールはナイフを取り出した。

「恐怖なものは、味わってしまおうか・・・、俺のモノにしてやる・・・」

パンティの端、片方の脚の付け根を切ってると、スッと抜ける。

あっという間に、パンティは脚から抜け落ち、片脚の太腿に丸くかきく絡まった。

・・いよいよだな、セフィリア・・・知ってやるよ・・・

サラザールは自分のペニスを取りしめた。

これほどはないほど勃起し、早くそそり立つペニスを、セフィリアの秘部に狙いを付ける。

「自分と同じそうだな、早く挿いんだろう？　トドメをさして楽にしてやろう・・」

サラザールは、セフィリアの腰を掴んだ。

長時間、焦らされた女のそこは
敏感な部分にもかかわらず、
サラザールの男根を ゆっくりと飲みこんでいく、
・・・・・っ!!
ズズズ
突然セフィリアの全身に緊張が走り
身体が大きく弾に跳ねる、
開いた唇は、唖然になったかのように、
声にならない悲鳴のような息を吐く、
ギュッ
んっ!!

バックで犯されながら、逃げるように腕を前に伸ばし、敷かれたシーツを掴みわしづ、

サラザールの腕がまらかなヒップに密着する。

その瞬間は、セフィリアをいっぱいに押しとけ、無尽蔵に快感を与えていた。

「おおう・・・・いいな気持ちだ・・」

数秒以上の快感に、サラザールは呻いた。

奥まで埋め込んだペニスから、セフィリアの熱い体温とヌメりが心地よく伝わってくる。

ゆっくりと腰を動かすと、ヌルヌルとした感触がペニスを包み込む。

とろけるような気持ちよさだった。

「これは・・・たまらんな・・」

ペニスを埋め込まれ、顔を歪めるセフィリアを見下ろし、サラザールは呟く。

「セフィリア様・・・美人なだけでなく、身体の味も素晴らしいものだな・・・無尽蔵に奥に入っ

たぞ。あとは、自分に楽しませてもらうとしようか・・・」

黒い髪を後ろから掴み、引き寄せ、サラザールは、本能的にセフィリアを犯し始めた。

「んうっっ！・・っ・っ・・んっ！・・」

セフィリアの、絞り出すような高い声が部屋に響く。

1回1回、力強く打ち込むサラザールの身体を受けとめる度に、セフィリアの身体は、大きく

揺に揺れる。

引き抜かれては、瞬間を埋めと言いてくる肉棒の存在感は、圧倒的だった。

セフィリアは、自分の身体が、男による配された感覚をせられようとしていることを、理解ではな

く、肌を通して直感的な反応として思い知らされていた。

気持ちいいという次元では収まらない、異様な感覚がセフィリアを襲っていた。

・・こんなのっ！・・気持っ・・良いそうっっ！・・・

歯を食いしばろうとしても、身体の奥からは思に抗かない。

「う、うっ！・・・うっ！　いやっ！」

自分の中に、押し入って来る肉棒の衝撃に耐えを揺らしながら、たとえようもないほどの快感

が込み上げてくるのをセフィリアは感じた。

「なかなかの、乱れようじゃないか・・・セフィリア様の乱れる姿は、いつかはてみたいと思っ

ていたが・・・想像以上の興奮モノだな」

サラザールは、セフィリアの細くくびれた腰を掴み、無感覚なヒップを引き寄せ、男の欲望の

象徴を突き込み続ける。

ンッ!
くっ!!
ビクッ
グチュ
グチュ
ビクッ
こんなの…!
気が狂いそう
……!

広間の壁に張られた大きな鏡には、男の医師のペニスに汚されながら、突きぶちまされる一瞬一瞬にとまらない汗をとばすセフィリアの姿が、美しくなし崩されている。

男を失いた舞つん這いの姿に、ょうの表情が現れているのが見えだった。

「僕をはてみるといい・セフィリア姫の美しい姿が、よくはえるぞ・・」

サラザールの声に、セフィリアが上気した顔をあげた、ソックとするくらい・色気のある顔だった。

「こ、こんな・・・」

それは、セフィリアが、今までみたこともない淫らな自分の姿だった。

突きとげたヒップを男が掴み、腰を密着させている。

淫靡な揺わに身体をくねらせ、腰を押けようとしたセフィリアに、サラザールが背中から覆い被さる、片手で身体を支え、もう片手をセフィリアの首に絡ど、強引に顔を向かせる。

「自分がどんな姿で、犯されているのか・・・よくはえるだろう？　どうだ？　うっとりするほど美麗じゃないか・・」

そうはう顔も、サラザールの顔はセフィリアと密着したまま、くりくりと輝いている。

「あ、ああっ！　い・・いやっ！・・・」

「ほら、見かれるだけでなく、こういう動きもいいだろ？　どうだ？　僕のリを見て感えろ」

恥しらず、無慈悲に、顔の真に近れ真の目がサラザールを見上げる。

何かをみるような、遠れた瞳が色気を帯びて、男の医師を誘くそそる。

「色っぽいぞ・・・この娘・・・結構じゃないか・・・」
「あう・・・っ・・・・」
セフィリアの口唇に埋められたサラザールの指が、ゆるやかな円舞を踊る。
艶めかしく、
撫で廻された手が、乳房を揉む。
「はぁ・・っ・・・」
喘ぐセフィリアのピンクのトキ、唾液と汗の雨がそうぐうと輝き、その
姿で、淫しい妖精がセフィリアの熱く焼けた女体を誘惑舞しているが、
サラザールの為めに、無理に反応して踊わるセフィリアの姿は、ドートン
全盛り立てた。
「ちょっと・・・危険できませんな、これは、私も、少しだけ参加させてもら
いますぞ・・・」
ドートンの手が、舞うん狂いの乳口を揉む、鷲を掴み、上目の西瓜を手が
揺ぐ、

「あ、あ・・だめ・・だめ・・・」

感じすぎて抵抗することもできず、ただ、うわごとのように繰り返す、セフィリアの身体を2人の男たちの舌と手が這い回る、太腿を手が這い上がっていく、

「だ、だめ・・・やめて・・・」

「何が、だめなのかな？　もしかして、ここかな？　いや・・やはりここかな？」

嘲笑うかのように動き回る指は、セフィリアをいっぱいに広げて深々と刺さっている男根の周囲を這い回り、ついに小さな芽を摘み出した。

「あ、あっ！　ああっ！・・」

悲鳴を上げ、最も敏感なところを探られる刺激に、ビクン、ビクンと反応する身体を押さえつけ、なおも男たちの愛撫は続く、

セフィリアの意識は、朦朧に落しようとしていた。

サラザールは、背中に舌を這わせながら、横に寝るセフィリアの姿を見つめていた。

両手を拘束された美しい女が、2人の男の淫猥な愛撫を受けて、身を震わせている、

壮絶な光景だった。

「・・どうだ・・感じすぎて抵抗もできないだろう？　では・・そろそろ、その身体で、この俺を満足させてもらおうか・・」

ガチガチのペニスを先端まで引き抜き、次いで力強くセフィリアの身体を貫く、

続けざまに、大きな動きでセフィリアを犯す。

「あああっ！　いやっ！　いやああっ！」

セフィリアの内部で暴れている、男の熱い塊、とても、耐えることなどできなかった。

セフィリアは、身体を激しく跳ねさせながら、ペニスの責めから何とか逃れようとする。

サラザールは、そんなセフィリアの腰を引き寄せ、その絶頂を深々と何度もえぐる。

「ほら、ほら・・・どうだ、感じるだろ・・・たっぷり味わえよ・・」

激しく、絶え間なく続く淫らなペニスの責めを受け、セフィリアの精神は崩壊に達した。

「いやあああ！！っ！」

んっ…!!
…っ!!
ミシャラ
ミシャラ
んっ!!
あぁっ!!
グチュ
グチュ

快感が極限に達したセフィリアの顔を、ツーッと涙がつたう。
長い髪を振り乱し、泣き声を上げて訴える。
「泣くほどイイのか？　まだまだ、激しくなるぞ、ほら、凄いだろ？　イキそうだろ？」
尻をつき、ヒップを高く突きだした淫靡な身体を、サラザールは高ぶる欲望責め立てた。
色っぽく泣き続けるセフィリアを、サラザールは夢中になってむさぼり犯し続ける。
「あああぁぁぁーーーっ！」
ついに、セフィリアは、腰をガクガクと揺らして絶頂に達した。
その瞬間、ギュッ・・とサラザールのペニスを締め付ける。
「うぅっ・・」
サラザールも、快感の頂点だった。
「いくぞ、中に出してやるぞ・・そら！」
最後に突き込んだその奥深く子宮口で、サラザールは、ペニスをドクドクと激しく脈打たせながら、放出のほとばしりを放った。

ぶるぶる
んッ!!
ビクッ!!
あぁ!!
ビクッ!!
ぶるぶる
ギュッ!!

強烈な絶頂だった。
「は・・あ・んっ・・・」
ビクビクと全身を痙攣させ、快楽の余韻に浸っているセフィリアに、サラザールは満足の声を漏らした。
「よかったぞ・・・セフィリア姫、また後で可愛がってやろうな・・。さて・・・お待たせしましたな、ドートン殿、順番を譲ってくださり、ありがとうございます」
「なあに・・・恐らく、私の方がしつこくて長いですからな、いいっていうことですよ・・」
ドートンがニヤリと笑った。

ガチガチに強張ったペニスを見せつけ、ドートンがセフィリアに迫る。
「さあ、今度は、私も味見をさせてもらいましょうか、セフィリア姫・・」
「い、いや・・・、来ないで・・・」
手錠をガチャガチャ鳴らし、逃げようとするセフィリアの細い足首を掴み引き寄せる。
「さて、セフィリア姫、たっぷりと愛し合いましょうか・・」
満面な笑を顔にかけ、セフィリアの身体にのしかかっていきながら、ゆっくりと、いきり立つペニスを突き立てる。
「ああっ!・・・く・くくうっ・・・」
細い身体は、白い顎と背中を同時に大きく仰け反らせ、ドートンを受け容れさせられていく。
熱が冷めぬ女の身体は、犯される悦びに再び燃え上がり始めようとしていた。
「あっ・・はっ・・・んんうっっ!」
抑え切れないほどイカされ、全身が感じるようになっているセフィリアは、ペニスの先端の侵入にビクンと腰を跳ね上がらせ、埋め込まれていきながら細かく身体を痙攣させる。
ドートンの強引な侵入に、伏せた長い睫毛が、ふるふると震える。
ドートンは、そんなセフィリアの顔を見つめながらニヤニヤと笑った。

そんなに感じるのですか…

そんなことで私のセックスに耐えられますかな？

時の番人といっても まったく可愛いものですな

ぶるぶる

ぶるぶる

くっ…！

ギシギシ

ほら 完全に根元まで入れますぞ…

グチュ

グチュ

ああっ！

セフィリアの腰を固定し、ペニスをずぶずぶと奥深く埋め込んでいく。
「あ！・・くくっ・・はあっ！・・」
セフィリアの身体が、のたうち跳ねる。
しかし、その下半身には、ドートンの男根が深々と突き刺さっていた。

「あっ・・くっ・かはっ・・・・」
ドートンは、腰を動かしていない。しかし、太い杭を、体内に打ち込まれたセフィリアの身体には、そのことがかえって苦しみとなっていた。
「ふふふっ。何だか辛そうですが、どうかしましたかな？」
ドートンの楽しそうな声が、セフィリアには恨めしく響く。
いっそのこと、激しく犯される方がよかった。
このように、女の官能を引きずり出され、生殺しにされている状態は、セフィリアにとって耐難だった。思わず、快感を求めて腰がくねりそうだった。
・・だめ・・・いけない・・男の思い通りになど・・・
粉汁が、じっとりと滲んでくる。背を左右に振って、狂おしい欲求に耐えようとする。
求めるものが与えられず、セフィリアの全身の性感は、高められるだけ高まっていく。
ほんの些細な刺激にさえ、反応してしまいそうなほど、肌がびりびりしてくる。
そのとき、ドートンが、不意に胸に吸い付いてきた。
「うううっ！！」
ビクンと大きく身体が跳ね上がる。
乳首を転がす、ねっとりとした舌が、腰にまで響くびりびりとした快感を呼び起こす。
しかし、それだけではない。その弾みでセフィリアの秘部は、ドートンの太いペニスを絞り上げてしまっていた。
「あああっ！！」
セフィリアは悲鳴を上げ、軽い絶頂に達した。

こうやって乳首を舐められると…またたまらなくなってくるのではありませんかな？

ご自分から腰を動かしてもいいのですよ？

レロ

そのような…イヤらしいこと…するわけ…ありません……

ふるふる

さっきから私のペニスをキュッキュッと締め付けているのはなぜですかな？

本当はいやらしい事を望んでいる証拠ではありませんかな？

ピチャ ピチャ

グッ

ギュ

私のモノが中に入っているのがわかりますかな？

ズズ

セフィリア嬢を犯したくてウズウズしているコイツですよ

ご希望ならコイツでセフィリア嬢を狂わせてあげますよ

グチュ

く…くくっ…！

ビクッ

け…汚らわしい…

ぶるぶる

そんな…イヤらしいことするのは…もう…やめてください…

手錠につながれていては
どうしようもないですな
さわ
さわ
ビクッ
ギシ
ギシ
ビクッ
無駄な抵抗は止めて
一緒に楽しむと
しませんかな？
こんなにイイ身体
しているでは
ありませんか？
くくっ…
うっ…馬鹿な…
ことをっ……
唇を噛みながらセフィリアは呻とか声を飲み込む。
無駄一杯の抵抗だった。
しかし唇は噛み、顔を赤く火照らせた表情はどれだけ感じているのかを示しているようなものだった。
その身体は、ペニスから送られてくる律動に、ビクビクと身体を反応させている。

第二杯の紅茶だった。

そんなセフィリアに、ドートンはリズムよく軽い律動を送り込み始める。

「そうですか？　しかし、手錠に繋がれていては、どうしようもないですな。無駄な抵抗はやめて、一緒に楽しむとしませんかな？　こんなにイイ身体をしているではありませんか・・」

「くくっ・・うっ・・馬鹿な・・ことをっ・・あっ・・」

しかし、瞳は潤み、頬を赤く火照らせた表情は、どれだけ感じているのかを示しているようなものだった。

その身体は、ペニスから送られてくる律動に、ビクビクと身体を反応させている。

「その強がりが無駄だと言うのですよ・・・。ほら、身体はこんなに感んでいますよ・・」

白磁に舌を這わせながら、腰を再び突き上げる。

「ああっ！」

セフィリアが、白い喉を仰け反らせる。

そのとき、セフィリアの瞳が、ペニスを求めて艶ましく誘惑にくねったのを、ドートンは見逃さなかった。

「ほう・・ついに自分から腰を振りましたな？　ふふふ、いい子ですな・・・。いいでしょう。あとは、私に、動いて欲しいのですな？　では、ご希望にお応えするとしましょうか・・」

セフィリアの脚を大きく広げ、その腰を、ドートンが左右についた両腕に引っかける。

大きく広げた＝字を描くような脚にする。

脚を大きく広げ、秘部まで晒している羞恥に耐えられず、セフィリアは眼を逸らす。

ドートンは、そんなセフィリアを楽しみながら、ペニスを動かし始めた。

「い、いやああっ！」

拒絶の言葉を吐きながらも、突き上げられる度に、甘い声を上げる。

媚薬で身体中が敏感になった肉体で、ドートンの責めに抵抗できるわけもなかった。

セフィリアは、男に汚される屈辱に身体を震わせながらも、その快感を堪えきれない。

グチュ
グチュ
くっ！
ギシ
ギシ
んっ！
ギシ
ギシ

ドートンが、ゆっくりと腰を動かすのにあわせて、切ない声が漏れてくる。
セフィリアが感じるのを楽しみつつ、ドートンは、ずっぷりと埋めたペニスを引抜きます。
「ふふふっ、思った通りでしたな、イヤだなんて言いながら、本当は、早くコイツを入れて欲しかったのでしょう？　控えめな態度をして、早く抱きたくてたまらなかったのですな？　その証拠に、ほら・・・・濡れてますかな？　こんなにお体は欲しがっていますぞ・・・」
ドートンのペニスが、セフィリアの中から引き抜かれ、再び奥まで突き入れる度にクチュクチュという音が響く。
「母の恋人なんかやっていたのでは、淫売と呼ばれるばかりで、軽蔑するこどもできんでしょう？　私の愛人になれば、皆様ごうして抱いてあげますよ・・・」
延々と続く、ドートンの言葉責め、セフィリアは、官能の渦に巻いつめられていた。

「わかりますかな？　コイツのような、女の体は、コイツの味を覚えたら離れつきですよ・・・、ほら、ほら・・・感じるとおっしゃってごらんなさい・・・」
「ダ、駄目、そんな・・・ことを・・・あっ・・・ふうっ・・・」

ギシ
ギシ
ビクッ
ビクッ
んッー!
…っ!!
わかりますかな？
コイツのよさが
女の身体がコイツを
覚えたら
病みつきですよ
グチュ
グチュ
ビク
ぶるぶる
ほら…
ほら…
感じると言って
ごらんなさい…

ほれほれ
どうですかな？
いいでしょう？

ピチャ

ピチャ

んっ！

…！

もみ

もみ

ぶる
ぶる

はうっっ…

ギュッ

レロ

んっ…！

ビクッ

ドートンの荒しい突き込みに、セフィリアの身体は激しくくねり必える。
その秘部は、押し入ってくるペニスを、少しでも奥へ奥へと呑み込もうとする。
「んっ！・・・くうっ！・・んんっ！・・」
「これは・・まさに、極上の女といったところですな・・・、時の貴人などには勿論しい、実にもったいない、素晴らしい身体ではございませんか・・」
興奮に駆られ、激しく腰を打ち込む。
セフィリアは、次々と襲いくる快感の波に翻弄されるばかりで、何も考えることができなくなっていた。
熱い鉄塊の塊を、何度も深々と突き入れられて、眉間にしわを寄せて耐え喘いでいる。
透明感のある澄み通った綺麗な汗が、ドートンの興奮を煽らせていく。
この上ないほど淫らで、またこの上ないほど美しい姿だった。

セフィリアの姿に、ドートンは、全身に快感が高まっていくのを感じる。
「そろそろ、私もいきますぞ・・・」
ドートンは、熱い高ぶりを出し尽くす最後の最後まで、セフィリアの身体を味わおうと、奥まで届けとばかりに体重をかけて強く突き入れる。
「いや、いやっ・・また・・あああ――――っ！」
再び身体を汚される予感も束の間、身体の奥で男の鉄塊の象徴が、これまでになく大きく膨張するのを感じる。
瞬間、ビクッ、ビクッと痙攣するように動くペニスに、セフィリアも狂り詰める。
・・あぁ・・また、身体の中に・・・・
熱い高まりを、秘部の奥に吐き出されたことを感じ、セフィリアの身体が、ビクビクッと痙攣する。
「んうううっ！！　あああぁぁぁぁ――――――！！　」
汗に濡れ、美しく光らせた裸身を反らせ、セフィリアは絶頂に達した。

ビクッ
ビクッ
ビクッ
!!
ギシ
ギシ
グチュ

エピローグ

数時間後、

男たちの後姿から、やっと解放されたセフィリアは、バスルームにいた。

バスルームとはいえ、豪華ホテルの大浴場といっても過言ではない広大の中、セフィリアの喘ぎ声がこだまする。

「今度は、そこに手を突いて、尻をこっちに向けるんだ・・・」

男の命令に、湯の中のセフィリアは、大人しく言われた通りに手を突き、尻を突き出す。

すかさず、男の指が、そのヒップを撫で回し、唇を押める。

前からも、また別の男が、開かれた股間に顔を埋めてくる。

男たちは、ボルディンとその部下たちであった。

「くくくっ、いいケツしてるじゃねぇかよ、こっとしろよ」

「うっ・・・あ、あ・・敏感です・・」

豊満のそこら中を這い回る舌の動きに、セフィリアの背中が伸び、いやいやをするように上体が揺れる。

「嬉しい声を出すようになったものだな、美貴には、大事なお客が来るんだ、お前には、たっぷりと稽古をしてもらうつもりだ、それまでに、お客好みの身体になってもらうからな・・」

大事なお客とは、麻薬組織の大物に違いなかった。

後ろから、秘部に、アヌスに指を挿入してくる気っさに喘ぎつつ、セフィリアは考える。

このまま、ボルディンに気に入られれば、美貴には麻薬組織の大物に会うことから、さら、

上手くいけば、トップの顔を見ることも可能だ。

・・今度こそ・・

密かな希望を胸に秘めるセフィリアのロッドを、ボルディンの両手が撫で回す。

「確かにイイ尻だ、ふるいつきたくなるようだな・・」

次いで、ボルディンのいきり立った肉棒が沈み込んでくる。

「うっう・・あぁん・・っ・・」

魅力的なヒップを揺み、激しく前後に動くボルディンに、セフィリアは、艶っぽいな女の声をあげて応える。

その間は、男たちはなまらず、熱心にしたたかをあかせている。

「さっきは、随分と気分を出していたな？　あの我慢強たちのは、そんなによかったかい？」

ボルディンに続いて、今度は2人の男たちが、卑猥な言葉を投げかけながら、セフィリアを間に挟んで身体を責めてくる。

後ろから、前から、男たちの硬いペニスが、セフィリアの身体をこじ開け入ってくる。

「これはよ・・・発狂するほどイイっていうぜ、この味も教えてやるよ・・」

「あっ、あっ・・・あぁぁんっ・・・」

同時に2人の男に、身体を犯される感覚は、今まで味わったことがないものだった。

男たちが前後から腰を動かし始めると、セフィリアは思わず絶叫した、その瞬間をくねらせ始める。

このたないほど淫らで、またこのたないほど美しい女に、男たちの興奮は徐々に高まっていく。

男は腰つき合いや、唇後の口にペニスを挿入に挿入されるセフィリアは、すでなった時か

らは、乳首を噛まれ、膣の襞が捲られ、未知の領域に誘い込まれていた。
ボルディンが、その正面に近づき、股間の昂ぶりを眼前に見せつける。
「ご褒美をやろう・・・コイツを咥えるんだ・・・」
上気して潤んだ目でボルディンを見つめたセフィリアは、切れ長の瞳を閉じると、ピクピクと脈を打ち、赤く反り返った男根に、ピンク色の舌を突き出した。
ゴクッ・・・
セフィリアの白い喉が上下に動き、口いっぱいに呑みこんだ太い男根に舌を這わせる。
「そうだ・・・上手だぞ。3つの口全部に、コイツを咥えこんだ気分はどうだ・・・」
・・くぅ・・・・
その下刀を動かせる衝動に駆られながら、セフィリアはその棒を懸命に握りしめる。
セフィリアの胸に、決して忘れることのできない、屈辱の苦い思い出が去来する。
あのとき、セフィリアは秘密組織の首領人物を、発作的に殺ってしまったのだった。
・・後悔はしていない・・
けれど、その後の騒変の連鎖が継続したことは、紛れもない事実だった。
・・今度こそ・・
セフィリアは、固く決心する。
そのためにも、今はこの男たちを倒すことはできないことだった。
セフィリアに、凌辱の疲れは、もうない。男たちも、そのことは十分に承知していた。
セフィリアを、ただの女と思いこむ輩は、自分たちの手に堕ちたものと考えていた。
黄金宮の主人も、その点では同じだった。時の番人と知っても、その卓越した戦闘力や、危険性までは、全く認識していなかった。
それどころか、他の女と同じく、セックス漬けにしてやったとばかりに喜色満面と秘境に浸っていたのだった。
だから、ボルディンに、そのことをわざわざ教えて、女の値をつり上げてしまうことはするはずもなかった。時の番人を手に入れた盗賊らは、それほど計り知れないものだった。
男たちは、これからもセフィリアを性の奴隷として、ボルディンに貸与するつもりだった。
しかし・・・その機会は二度と訪れることはない。
翌月には、貸与が叶わぬ身体になっているだろうことは、セフィリアだけが知ることだった。
間もなく、男たちは快感の高まりとともに、その欲望の精液を存分に放つ。
セフィリアもまた、その精液に汚されながら激しく昇り詰め、男の身体に崩れ落ちる。
今井ある者が、無理はないことに男たちは気づくわけもなく、セフィリアの身体にただひたすら狂喜する。
事件は、やっと解決に向けて少しずつ進み始めていた。

クリムゾン　コミックス
Ａ３４－１

麻薬組織を探るためにある男を追っていたセフィリアはその途中、電車の中で大勢の痴漢たちに囲まれてしまう。尾行中だったセフィリアは目立つ行動をとるわけにはいかず、なすがままに体を触られ、気づかないうちに媚薬のカプセルを秘部に入れられ、一般人相手に抵抗もできないほどに堕とされてしまう。
そのままホテルに連れ込まれセフィリアは女としての屈辱を思い知らされる。

FOR ADULT ONLY